

「持続の障がい」としての高次脳機能障がい

松島恵介*

A Higher brain dysfunction, as “disorder in function of duration”

Keisuke Matsushima*

People with higher brain dysfunction often have difficulty with interpersonal relationship. It is particularly worth noting that they have deep-rooted problem with building trust in a relationship.

This article discusses their problem with building trust in the light of “disorder in function of duration” — two prominent types of duration (1. duration of “memory” 2. duration of “participation in community organizations”) —.

1. はじめに——高次脳機能障がい者における受傷後の人間関係

不慮の事故や病気により高次脳機能障がい¹⁾を負うことになった当事者（以下、単に『当事者』と略記することがある）の周囲には、さまざまな人間関係の問題が発生するといわれる。

いわゆる人間関係といっても、友人関係や職場での間柄に限らず、最も身近な家族同士の結びつきにもそれは及ぶことがある。たとえば、当事者の退院後、自宅での生活が開始されてしばらく後にその家族から「事故以前とは人が変わったようだ」、「うまく付き合えなくなった」等といった訴えが聞かれることがある²⁾。

高次脳機能障がいには、注意力や記憶力、判断力といった認知能力の低下、また、情緒不安定や人格変容など、さまざまな症状がみられるが、これらは複雑に絡み合い、また相互に作用しつつ、こうした人間関係の不適応を生じさせているといわれる。

2. 問題設定

2-1. 人間関係における「信頼」をとらえる視点

本稿は、高次脳機能障がい者の社会復帰³⁾の過程において彼らの取り結ぶ「人間関係」、とりわけ人間関係構築のベースにあると考えられる「信頼の形成」という問題に関心がある。

しかしながら、こうした漠然とした問題設定は、テーマとしての抽象性が極めて高いうえ、その対象の範囲が広範すぎる為に、ともすると議論が際限なく拡散するきらいがある。したがって今回は、筆者の専門領域にもとづく関心⁴⁾にしたがって以下のような限定を行い、予め主題および方法論を絞り込んだうえで議論を行うこととする。

* 龍谷大学社会学部

本稿では「信頼の形成」という問題について、主として「持続」⁵⁾という観点から捉えることとする。その際、以下の二通りの「持続」に焦点をあてる。

①記憶の「持続」について——高次脳機能障がい者に多い、記憶が長時間「持続」しない者における信頼形成の問題について議論する。

②参加の「持続」について——高次脳機能障がい者コミュニティへの参加の「持続」性が信頼形成にどのような影響を与えるか、議論する。

場合によっては、こうした限定を施すことによってむしろ隠蔽される問題が出現する、といった謗りもあろう。しかしながら、従来の高次脳機能障がい関連の研究には未だこうしたアプローチが試みられていないことに鑑み、また、上記のような限定によって具体的かつ明瞭に何らかの問題が浮かび上がってくる可能性を期待し、こうした方針で論をすすめることとしたい。

2-2. 「信頼」の二つのベクトル

先述したように、本稿では、人間関係のベースにあると思われる「信頼」について主観的に採り上げるわけであるが、「信頼」の形成を議論するにあたって⁶⁾、ここではひとまず便宜的に以下のような二つのベクトルを分けておきたい。

他者<から>信頼される

他者——[信頼]——→自己

他者<を>信頼する

他者←——[信頼]——自己

もちろん、いわゆる「積年の信頼関係」が確固たるものとして長期間維持されているような人間関係においては、この2つのベクトルは独立したものとしては見えにくい。しかし、本稿が問題とする、受傷後の「新たな」信頼関係が形成されつつあるような状況においては、この2つのベクトルは共に重要なものとして、それぞれ前景として意識されることが多いと思われる。

高次脳機能障がい者において受傷後の人間関係の形成が困難に満ちていることについては先に少しばかり触れたが、先ず以下では、その人間関係のベースとなる「信頼」の次元において、「他者<から>信頼される」・「他者<を>信頼する」、そのいずれが高次脳機能障がい者にとってより困難な課題となるか、主としてその点について考えつつ、「信頼」と「記憶の持続」の関係について議論をすすめてみることにしたい。

3. 「信頼」と記憶の持続

3-1-1 「他者<から>信頼される」ことにかかわる記憶の問題

先ずは「他者<から>信頼される」ことにかかわる記憶の問題について論じたい。

ところで、高次脳機能障がいにおける「記憶」の障がいには、さまざまなレベルがある。健常者にほぼ近い記憶を持つ者もいれば、重度の認知症に近い症状を呈する者まで、そのヴァリエーションは極めて広範にわたる。そこで本稿では、論点をシンプルにするために、新しい記銘が困難な

「前向性健忘」のやや重度の記憶障がい、具体的には、新しく覚えた事柄が一日を超えて持続しないレベルの障がいを、凡その対象として議論を行うこととする。なお、これは高次脳機能障がいにおいてはしばしばみられる障がいのレベルである。

さて、高次脳機能障がいには記憶力低下をはじめ様々な認知機能の低下が伴うが、本稿の議論の文脈において留意しておくべきは、以下の点である。こうした症状は、医学的な診断としては単なる「認知機能の低下」として把握されようが、これが実社会の営みのさなかにおいて現れた際には、「信頼」の問題と切り離すことが困難になる、という事実である。

問題の核心により接近するために具体的な例を考えてみる。

高次脳機能障がい者に多い前向性健忘、すなわち「新しいことが覚えられない」人物は、社会において他者からどのような評価を受けるであろうか。

例えば職場において。この彼⁷⁾は指示された作業を円滑にこなすことが出来ないばかりか、毎日のようにそのやり方を周囲の者に聞き返すことになるだろう。また、忘却からくる仕事上の失敗を頻繁にひきおこす。さらに、その失敗が教訓として活かされることは殆どなく、何度も同じ失敗を反復することになる。また、大事なミーティングをすっぽかすこともしばしば。そればかりでなく、取引先の役員の顔と名前、毎日出会う同僚や上司の名前や属性といったことについてすら、たびたび「忘れてしまう」……。職場ばかりではなく、地域の集いや趣味のサークルといったコミュニティにおいても、状況はさほど変わらないだろう。作業の内容、人の名前と顔、スケジュールといった、社会における活動を支える根幹は、やはり記憶である。これらを「忘れる」人物はつねにコミュニティに何らかの亀裂を惹き起こしてしまう。

このように、単に記憶が持続しないこと（以下、『非・持続』と表現する）からくるトラブルをイメージしてみるだけでも、実際のところ、「忘れる」人物は単に「記憶力がない人」という評価のみを周囲から受けることは稀であると思われる。多くの場合において、彼は「信用・信頼できない人」としてみなされるはずである。これは、当初単なる〈記憶〉の問題であったものが、活動の渦中においては彼の〈人格〉の領域へと次第に侵犯していくことを意味している。こうした事情は、たとえば当該コミュニティの多くの人々が予め「彼は記憶力が低下する障がいなのだ」と十分に理解しておいたとしても、さほど変わらないことが多いと聞く。

さらにいえば、このような状況は、高次脳機能障がいが多い、注意力障がい、あるいは、情緒に関わる障がい（情緒の不安定やパニックの症状が多いといわれる）においても同様であると思われる。すなわち、注意力が散漫である、情緒が不安定である、といった障がいについて、社会に生きる健常者の多くは「その障がいだけを見る」ことをしてくれないのである。多くの場合、「注意力が散漫『なので何事も責任を持ってきちんとやり遂げられない人物』」、「情緒不安定『なので人々の和を乱す人物』」といったように、そうした障がい自体は「信頼」の低下へとつながる人物評価へと結びつけられてしまう。＜医師の診断＞と＜世間の診断＞とのあいだには大きな乖離がある。

さてここまで、記憶障がいを中心に、高次脳機能障がいの主たる症状が「他者＜から＞信頼される」ことの実現をいかに妨げるか、ということを見た。もちろん、ここでいう「信頼」とは、人間関係を成熟させることにかかわる類の厚い「信頼」にはほど遠いものである。仕事の手順や、スケジュール、人物の名前などを忘却することによって損なわれる信頼、それは、社会人としての最低

限の信頼、といったレベルのものであることはいうまでもない。

ここでは、記憶の非・持続という事態が、こうした低次のレベルの「信頼」すら獲得することを困難にさせる、ということを確認しておきたい。

次節においては、先に提示したもう一方の信頼のベクトルである「他者＜を＞信頼する」ことに関連して考えをすすめていく。

3-1-2 「他者＜を＞信頼する」ことにかかわる記憶の問題

我々が他者と新たに関係を築こうとする過程において、その人物＜を＞信頼するために必要な「認知の機能」とは何であろうか。このような問いに対してその詳細を即座に提示することは難しいだろうが、そこに「記憶」という認知機能が全く欠如しているとすれば、信頼自体がそもそも成立しないことは容易に推測できよう。いうまでもなく、他者への信頼とは、過去から現在までの他者とのコミュニケーションの記憶を前提として成立するものである。われわれは、他者と何度かコミュニケーションを持ち、その記憶を維持するなかで相手を少しずつ信頼できるようになるはずである。

むろん、このことは、前節において問題としたような「社会人としての最低限の信頼」を相手に見出そうとする際にもあてはまるとおもわれる。過去の時間の蓄積とその記憶がなければ、そこにはこうした極めて低次のレベルの信頼すらも成立する余地はない。

以上の議論を踏まえるならば、いかなる場合においても、他者に出会った瞬間に「即座に」相手を信頼することはそもそも不可能であることがわかる。念のため、思考実験をしてみてもよいだろう。いま我々の目前に「信頼されるべき資質を全て持っている」他者（そのような人物が実在するかどうかはとりあえず措くとして）がいきなり登場したとして、我々はその人物を即座に信頼することができるか。いうまでもなく、それは困難なはずである。（よほどの粗忽者でない限り）われわれは何度か彼とコミュニケーションをとりつつ、ある程度の時間をかけて彼を信頼していくようになるはずである（あるいは彼が余りにも完璧にみえる条件を備えているからこそ逆に信頼しない、というケースもちろんあるだろうが）⁸⁾。

「他者＜を＞信頼する」ためには時間と記憶が必要である、という極めて当たり前の事実は健常者の日常においては忘れられがちであるが、記憶機能が十全でない高次脳機能障がい者においては重要な問題として受け止められなければならない。彼らは他者とのコミュニケーションの内実を「忘れ」つつ、信頼という問題に関わり続けなければならないのである。すなわち、記憶にハンディを持つ高次脳機能障がい者が直面しているのは、「忘却しつつ、信頼する」という、逆説的で困難な課題なのである。

このことに関連して実際の事例を紹介したい。バイク事故により受傷した「尾山一樹さん」のケースである（原口、1999）。

早起きの一樹さんはいつも定刻まえに作業所に着き、同室の仲間と顔をあわせると明るい表情で、「おはよう」と朝の挨拶をかわす。またほかの仲間がやって来て、お互いに「おはよう」と挨拶しあう。しかし、そのうちに彼はついさっき挨拶をかわした仲間にまた「おはよう」と

言うのである。

「もうさっき挨拶したじゃない、尾山くん」

「あ、そうだったっけ?」

でも、朝のせわしい時間に作業所をあちこち動いているうちに、もう一度出会うことがある。そこでまた彼は「おはよう」をやってしまうのだ。一樹さんはさっきその人に挨拶したことをもう忘れていてから真顔で朝のことばをかけるのだけれど、相手は再三「おはよう」を言われていや気がさしてくる。そこでこんどは「またか」と、返事を返さないでいる。そうすると一樹さんは気分を害して、「無視された」ということになり、次に「自分はきらわれている」「ここをやめたい」と増幅してしまうのだった。

この関係が険悪になって対立することがしばしばだったが、ここにまたひとつ問題が生まれるのだ。仲間は険悪になり対立した気分をそう簡単に忘れてはいない。ところが一樹さんは翌日にはきれいさっぱりと忘れていてものだから、ケロリとしてまた明るい表情で「おはよう」と呼びかけるのだ。

この「一樹さん」は、記憶が短時間しか持続しない人物である。ここでは、そんな彼をめぐる「信頼」の問題の本質が、きわめてシンプルなかたちで提示されている。ただし、これまでに明示されていなかった問題点がひとつ明らかになっている。具体的にいえば、彼が、挨拶を返さないという友人の裏切り（と一樹さんが捉える）行為についての恨みさえいっさい記憶にとどめることなく「忘却」してしまい、翌日にはまったく新たな人間関係としてそれを最初からやり直すことになる、という点である。けっきょく彼は何の後腐れもなく、ニコニコと挨拶をしてまわる。こうした風景は、ともすると障がい者の生活のなかの「美談」的なものとして取り扱われそうな出来事であるが、じつのところ、こうしたことは人間関係上の極めて深刻な問題であろう。いうまでもなく、彼は極めて酷い裏切りや仕打ちをいくら与えられても、「人を信頼しない」ということが出来ないのである。このことは、彼が社会生活を営むうえでは決定的な障がいとなる。

彼においては「コミュニケーションの記憶」が日を跨いで蓄積されることはない。したがって、彼はいつまでたっても「他者<を>信頼しない」ことも、そしてまた当然のことながら、「他者<を>信頼する」ことも出来ないのである。

もうひとつ事例を挙げておこう。てんかん手術により海馬を傷つけられ、重度の前向き健忘へと至った「ヘンリー」氏の事例である。(Philip J.Hilts, 1995. なお、以下の引用は、観察者の視点とヘンリー本人の視点を混交して、物語風に記されている。)

私たちが近づくと、彼は曖昧な表情のまま目を上げた。最初の疑問はこうである。この人たちは自分に会いにきたのだろうか。それともただの通りすがりの人なのか。足が椅子のほうに近づいてくる。ということは、彼らがこちらに向かってきているという合図だ。ぶつかる直前に、彼は頭を上げた。相手の眼差しから、ヘンリーはそれがはじめて会う人か、そうでないかを知ることができる。自分を知っている人なら、その微妙なふるまいでそれと分かる。表情がかすかに動き、目が彼の目を求める。それを見てヘンリーも、自分がその相手を知っているは

ずだということが分かるのである。いま彼がこちらに気がついたのは、私たちがすぐそばに来たときだった。どんな出会いでも、彼にとってはこの瞬間が決定的となる。このわずか数秒のあいだに、多くのことが分かるのだ。それさえすめば、後はこの新しい人たちが何を望んでいるかを推測していくだけでいい。おおむねヘンリーは人と会うのが好きである。彼が他の人たちから引き出している楽しみがどんなものかは分からないが、彼にとっては人との出会いはなんらかの気まぐれな楽しみを与えてくれるパズルである。理屈では自分の状態は分かっているはずだが、少なくとも彼はくりかえしテストされていることにプライドを感じているようだ。こうしたテストは「ほくだけじゃなくて、他の人にも役に立つ」のだ、と彼はよく言う。その言葉は会話を続けていくための魔よけの役をしている一方で、自分を運命に適應させるためのマントラの呪文でもある。

「こんにちは、ヘンリー。私のこと、分かる？」

「知ってるみたいな気がするけど——」と、彼は少し口ごもって、相手が必要な情報をもたらしてくれるのを待つ。

「散歩にいかない？ヘンリー」

「うん、いいよ」。彼はゆっくりとうなずく。少し不安そうだ。

多少極端な事例かもしれない。が、われわれにとっては示唆深い内容である。

ここでは人との出会いに「パズル」という特殊な比喩が与えられている。ヘンリーは出会う人々を自らの記憶のうちに捉えることが出来ず、ある種のゲーム的推理によって分類するのである。すなわち、彼にとって他者とは、特定の名や履歴をしたがえた一個人などではなく、「知ってる（はずの）人／知らない人」、「自分にテストする人／テストしない人」・・・といった分類体系のなかのカテゴリー的存在として、そのつど現れ出る記号のようなものに過ぎないのである。ここにあるのは無時間、あるいは現在という刹那でしかなく、さきほどの議論からいえば、そこには最早、時間の蓄積のうえに形成されるはずの人間的な「信頼」など生まれる余地はない、というべきだろう。

さて、ここまで、「他者<から>信頼される」こと、そして「他者<を>信頼する」こと、それぞれについて、記憶が信頼の形成に深いかかわりを持つことが浮かび上がってきた。ただ、当初の疑問は、「このいずれが、高次脳機能障がい者にとってより困難な課題となるか」であった。しかしここでは結論を急がず、彼らの記憶の非・持続について、それがどのていど外部の「記録装置」によって補うことが出来るのか、その可能性についてしばし考えてみることにしたい。

3-2 外部記録装置は高次脳機能障がい者の「忘却」を補えるか？

一般に、高次脳機能障がい者の忘却を補う際に多く用いられるのが、メモ、あるいは、携帯電話、PDA⁹⁾、電子レコーダやデジタルカメラといった「外部記録装置」である。これらのうち電子機器に関しては、近年、小型化・大容量化・入出力の簡易化・低価格化がすすみ、記録装置としての実用性が飛躍的に向上してきた。じっさい、こうした「外部記録装置」を駆使して日常生活を過ごす高次脳機能障がい者も多い。彼らはそうした機器を身につけ、記録し、そのデータを適宜参照しながら生活を送っている。

では、こうした外部記録装置によって、前節における記憶の＜非・持続＞の問題は解決するのだろうか。

3-2-1 「他者＜から＞信頼される」ための記憶の補完

さて、まずは「他者＜から＞信頼される」とことと記憶・記録の関係からみていく。先に確認しておいたのは、記憶の非・持続は、他者からの「社会人としての最低限の信頼」すら得られない、という事実であった。この問題は、外部記録装置の活用によって解消されるのであろうか。

事例をみてみよう。「ジェレミー」という青年のケースである（『NHK サイエンススペシャル』日本放送出版協会、1993）。

ジェレミー青年は、記憶力はほとんど失ってしまったが、残っていたきわめて高い知能と集中力で、記憶力がないハンディキャップをなんとか乗り越えようとした。そのために彼が考案したのは、テープレコーダーとアラーム時計、システム手帳、日記によるジェレミー式記憶システムで、彼は、これを失った脳の記憶力の代わりに駆使しはじめた。

このシステムは次のとおりだ。まず、テープレコーダーは、毎日の会話や体験をその場で記録するのに使われる。そして、アラーム時計は、約束の時間といっしょに十五文字のアルファベットを入力することができ、アラームが鳴ることで、この文字を見て、相手の名前や場所の手がかりを得る。システム手帳には、スケジュールのほかにソーシャルページと名付けられた部分があって、彼の知り合い約七〇人分のそれぞれのページに、その人と話した内容やその人に関するできごとが記録してある。新しく人と出会うと、その人のソーシャルページを追加し、以後、次に出会ったときには、そのページを見ながら相手がどんな人だったか、最後に会ったときにどんなことを話したのかを確かめる。こうした工夫はほとんどがジェレミー青年自身が苦心の末、改良してきたものだった。

こうして一日中かかって吹き込んだテープレコーダーの記録を、彼は、毎晩すべて書き起こす。そして、その内容をシステム手帳のソーシャルページに整理し、そのなかでも後で思いださなければならないことだけを日記に記録する。彼の日記は鍵のついた大きな木箱に収められていて、人目に触れないようにソファと壁の間に大事そうにしまっている。私たちの取材中も、けっして触れることは許されなかった。この木箱の中には、彼が脳出血で記憶力を失ってから現在までの、十数冊の日記が収められているのである。

“This is my record of life.”

日記のことを尋ねたときに、彼の口から聞かれた言葉だ。記憶力を失い、思い出を作ることができなくなった彼にとっては、まさにこの日記こそが、生きたという証であり、自分が誰なのかを残していける大切な記録なのである。

様々な意味において、思わず絶句してしまう事例である。が、われわれは先にすすまなくてはならない。この彼のように、重度の記憶障がいを被りながらも、巧みに外部記録装置を用いて社会生活を営んでいる例は、かならずしも特殊なケースではない。先述したように、装置や記録法の違いこそあれ、じっさい、こうしたやり方を採用している高次脳機能障がい者は多い。

こうした外部記録装置によってきっちりと補完される記憶といえ、先ずは、事務的な事項やものの名称、あるいはスケジュールなどの情報が該当するだろう。これはちょうど、先に述べた「社会人として最低限の信頼」を「他者＜から＞」得るために必要な「記憶」といってよいだろう。たしかに、このていどの事務レベルの信頼を獲得するには、外部記録装置は有効であると思われる。

では、より高次の信頼を「他者＜から＞」得るためには、こうした外部記録装置は役にたつのであろうか。おそらく、この問いにすんなりと答をだすのは難しいと思われる。当事者が何をどう記録するかによって事態は大きく変わるだろうし、何よりもこうしたレベルの信頼は、多分に当事者の人間性とよばれるような領域が深く関わる問題であり、ケースバイケースで事情は大きく異なるからである。明確な答はここでは慎重に留保しておこう¹⁰⁾。

3-2-2 「他者＜を＞信頼する」ための記憶の補完

では一方、「他者＜を＞信頼する」ことに関わる記憶機能は、外部記録装置によって補完することは可能であろうか。

まずは、前節において、外部記録装置により補完可能とされた「社会人としての最低限の信頼」レベルの問題から考えてみよう。具体的にイメージするなら、たとえばこのジェレミー青年であれば、それまでの記録を参照しながら「この相手は約束を守っているようだし、依頼したことも手順通りやってくれる、待ち合わせにもきちんと来る人物のようだ・・・ETC.」といったように、多くの場合において、他者への「社会人としての最低限の信頼」はひとまず確認できるだろう。

しかし、そうした事務的な信頼よりも深い信頼へと議論を移していこうとする際に留意しておかねばならないことがある。ジェレミーの「ソーシャルページ」にどのようなことが書かれているにせよ、記憶障がいを持つ者にとっては、他者に関する情報はページを参照するごとにのみ確認できることであって、そのページを閉じてしばらくすると、それらはやがて失われる運命にあるのだ。すなわち、仮に他者に対する人間的な信頼が何らかのかたちで芽生えたとしても、それはページを開いている間だけ、すなわち、持続することがないのである。僅か短時間という時間幅でしか存在しえない信頼は、本来の意味において信頼といえるのだろうか。

しかしながらそもそも、これ以前の問題として、記された情報によって確認できる信頼など、取るに足らないものであることに気づかねばならない。事務レベルを超えた人間的な信頼とは、相手に関する記憶が明示的に「情報として」参照されたときにはじめて現れ出るような認識ではなく、じっさいはむしろ逆で、そのような記憶が背後において（明示的ではなく）潜在的に在り続けることによってじめて成立する、持続としての認識であるといえるだろう。すなわち、記憶が、むしろ「明示的に情報として示されていない」ことこそが、本質的に信頼を信頼として成り立たしめていると思われる。いくら詳細かつ膨大な記録を残したとしても、それが情報レベルより深化した記憶としてこのように受肉化されないかぎり、信頼の形成はありえないだろう。ここに仮定されているのは、＜記録の持続＞がなしえない、＜記憶の持続＞である。

したがって、先の議論も修正せねばならない。先に記録装置によって得られるとされた「社会人としての最低限の信頼」である。そのレベルで「他者＜を＞信頼する」ことすら、記録補助の力を借りたとしてもやはり困難なものになるだろう。ノートを開くたび、あるいは、情報を電子機器で呼び出すたび、行われているのは、その人物にたいする信頼生成というよりむしろ、彼と事務的コ

コミュニケーションを続けるべきか否かの、さしあたりの資格確認のようなものに過ぎない。

前節において検討した、「社会人として最低限の信頼」を「他者<から>」得るために必要な「記憶」は、その記憶対象がモノ・コトのレベルであったからこそ、外部記録装置によって補うことが可能であった。しかしながら、「他者<を>信頼する」ことにかかわる記憶が対象とするのは、徹頭徹尾、「人」であるが故に、記録装置で補うことは不可能になるのであろう。

このように考えてくると、やはり、「他者<を>信頼する」ことに関する記憶の非・持続性は、外部記録装置によって補うことが困難であると結論せざるを得ない。

※ ※ ※

さて、この第3節を閉じるまえに、ややわき道に逸れることになるが、多くの高次脳機能障がい者が受傷後におこなう「リハビリテーション」という営みと、そこにおける信頼の形成の関係についてごく簡単にふれておきたい。

高次脳機能障がい者は、受傷後、精神および身体の大領域にわたり、様々なリハビリテーションを行う。それらの目的を簡潔に述べるならば、障がい者自らの能力および技術を向上させる、あるいは不安定なもの（たとえば注意力や情緒）を安定させる、というものである。より抽象化して述べるなら、いかに受傷前の「健常者」の状態に戻るか、すなわち、いかに「一人前の」状態に近づくか、という目的（目標）である。こうした方向性を、先の「信頼」の在りようと絡めて考えるのであれば、これらのリハビリテーションは、受傷以前の「他者<から>信頼される」人間への立ち戻りを指向するものであるといつてよい。

なお付言すれば、先に述べたような、「他者<から>信頼される」ことにかかわる「記憶の非・持続」を補完するための技法などがリハビリテーションに盛り込まれるケースも多い。たとえばそこでは、忘れられがちな用件の記録の仕方、あるいはその管理および提示の仕方、といった「外部記録装置の使用法」について具体的に学ばれている。

さて翻って、「信頼」のもうひとつのベクトルである、「他者<を>信頼する」という点について考えてみる。こうした指向性をもつリハビリテーションは果たしてあるのだろうか。

このような視点から改めて考えてみると、殆どのリハビリテーションは「他者<を>信頼する人間」ではなく、やはり「他者<から>信頼される人間」への回復をこそ目指しているように捉えられる。具体的に、「他者<を>信頼する人間」にむすびつくようなプログラムは見当たらないのである（ただもちろん、障がい当事者とリハビリテーションを行う療法士や医師などとの間に信頼関係が形成される可能性は残されているが¹¹⁾）。

蛇足ながら、われわれの社会における教育一般について考えるにつけても、こうした構造は同様であるように思われる。すなわち、『他者<から>信頼される人物』になるための教育プログラムは多いが、『他者<を>信頼する人物』になるためのそれは極めて少ないのである。この種の問題はリハビリテーション一般の問題のみならず、教育、ひいては我々の社会全体にも通底する問題であるといえるだろう。

※ ※ ※

以上、記憶と信頼の問題、外部記録装置の問題、そしてリハビリテーションの問題を論じたところで、先の問いによりやくひとつの答えらしきものを用意することができる。われわれの観点からみるならば、記憶の持続性にハンディを持つ高次脳機能障がい者にとって、「他者<を>信頼する」

ことは、「他者<から>信頼される」ことよりもより多くの困難を孕むのではないだろうか。

次節以下では、もうひとつの問題、すなわち、信頼をめぐる「コミュニティへの参加の『持続』」という別の観点から議論することにした。

4 高次脳機能障がい者コミュニティにおける「信頼」の生成

本節では、高次脳機能障がい者のコミュニティにおける「信頼」のありかたについて議論することを主題とする。これまでは社会における他者（健常者）との関係を論じてきたが、以下では高次脳機能障がい者同士の信頼、とりわけその出会いの最初期における信頼性の萌芽の可能性自体に焦点をあてようとするため、ひとまず「他者<から>信頼される」／「他者<を>信頼する」という先の二分法は用いないことにしたい。

なお、ここでは「記憶」は主題とはならないが、「持続」という観点がひきつづき主たる分析の道具となる。具体的には、高次脳機能障がい者が集う場における、メンバーの参加の持続性と信頼関係の発生が本節の主題である。

4-1 クラブハウス「コロボックル」

4-1-1 「コロボックル」というコミュニティ

筆者が2001年5月より研究フィールドとしている、札幌市内にあるクラブハウス「コロボックル」¹²⁾は、高次脳機能障がい者を対象としたコミュニティの我が国における草分け的な存在である。

通所者は20～30代の男性（女性は少数であり休日に設けられる『レディースデー』に参加する）が殆どを占めており、彼らにとっては自らと似た境遇・年代の者と交流する絶好の場であるといえる。通所人数もおおよそ10人前後（時期によってバラつきはある）であり、この規模からみても相互のコミュニケーションが比較的し易い共同体であるといっていよう。

こうした点から考えると、コロボックルにおいては本稿が主題とする「信頼」の生成が生じうる可能性が大いにあるようにみてとれるが、実際はどうであろうか。本節では、2001年から2005年に至るまでの筆者の観察を軸にして議論をすすめたい。

4-1-2 「コロボックル」における「自由」

コロボックル（2005）の発行する機関紙によると、通所者（以下、『メンバー』と呼ぶことにする）がコロボックルにおいて行う活動は、「当事者交流、生活支援、就労支援、軽作業」とある。こうした形態はほぼ2001年に入ってからであるという（それ以前は事務作業中心）。

筆者¹³⁾がコロボックルを頻繁に訪れていた当時（2001-2年頃）に強く感じられたのは、そこにある「自由さ」であった。コロボックルにおいては、あらゆる活動は決して「強制」されない。メンバーは、好きな日に、好きなように来所し、好きなことをする。

たとえば、筆者が訪問したある日のコロボックルの様子は以下のようなであった（筆者のフィールドノートより）。

・・・パソコンで会報づくりの事務作業を行うメンバーのとなりで、マージャンや囲碁、オセロなどのゲームに興じる者がいる。少し離れた場所では、ギターを弾き歌を歌うものがある。その一方で、近隣のビル掃除のアルバイト（コロボックルが業務を請け負っている）に精出す者あり、ま

た、外部の業者から委託された箱折りや封筒作成といった授産施設的な作業をする者がいる……。

彼らは、誰からも強制されることなく、思い思いにそれぞれの活動に従事していた。また別の日には皆でスポーツ、あるいは、パソコン研修、木彫り教室、といった活動も頻繁に行われていた。さらには、ボーリング大会、旅行、バーベキュー、季節の折の各種パーティ、バザー、高次脳機能障がい関連の講演会や研修会への参加（国内外）、といった幅広い活動メニューが存在していたが、そこに参加するかどうかは、やはりメンバーの完全な自由意志に委ねられていた。

なおこうした「自由さ」をあらわす当時の資料として、「脳外傷友の会『コロポックル』5年の歩み（コロポックル、2003）」と題する小冊子に収められた生活指導員（主任格）の文章には、以下のような記述がある（脳外傷友の会「コロポックル」、2003.）。

「1，作業所¹⁴⁾のメンバーについて

（1）資格

作業所のメンバーの資格は、脳外傷友の会「コロポックル」（筆者注；クラブハウス『コロポックル』を支援する団体で、現在はNPO法人である）の当事者会員であること（年会費を一口2000円以上納めていること）のみです。原因（事故、病気）、性別、年齢、住んでいる場所は一切問いません。また、「週に何回以上」という通所義務規定も（今のところ）特にありませんので、作業所に来ようが来まいが、友の会の当事者会員は、すなわち全員が作業所メンバーといえるわけです。

（中略）

2，作業所のこの1年の活動

（中略）

（3）2001年1月～

21世紀に入ったからというわけでもないのですが、運営方法を一新し、メンバーによる役割分担制・自主運営制となりました。これまでの活動でメンバー一人ひとりのやりたいこと、向き不向きがかなりはっきりしていたため、指導員や役員がやってもらうことをすべて考えるよりは、メンバー個々人が自分である程度活動内容を決めて、それを他のメンバーやスタッフが援助していく、という方が現実的であると思われたためです。」

以上の抜粋からもわかるように、コロポックルにおいては、あくまでもメンバー自身が主体的役割を果たしつつ、その「自由」は最大限に尊重されている。

4-2 コロポックルにおける「自由」の孕む問題

但し「自由」には得てして弊害がつきまとうものである。われわれの関心にかかわる範囲でこのことについて考えてみたい。

コロボックルへの参加が「自由」であるということは、不参加および脱退についてもまた「自由」ということであるが、このことは持続するコミュニティにとっては何らかの弊害となるはずである。以下では、その内実を「信頼」という本稿のテーマに少しずつ絡み合わせながら議論をすすめていきたい。

筆者が頻繁に観察を行っていた2001年当時のエピソードを足がかりに考えてみたい。あるとき、それまで足繁く通っていたメンバーのうち何名かの足が少しずつコロボックルから遠のき、最終的にはいわゆる「自然退会」のような状況へと陥ったことがあった。なおこうしたケースは珍しいことではなく、何度となく筆者は同じことを経験したものであった。

筆者の観察の範囲では、そのほとんどが彼らの人間関係における「好き嫌い」（このことばは実質的には『嫌い』を意味する。以下、この意味において用いる）から派生したものであった。具体的には、「〇〇（メンバーの固有名詞）がいるとムカつくんだよな、奴のいないときに来よう」・「××（メンバーの固有名詞）がコロボックルに来るんなら、もう俺は来ないわ」、といった類の発言がその当事者からよく聞かれたものである。そしてほとんどの場合、そのきっかけは取るに足らない非常に些細なことであり、そこから極めて主観的な「好き嫌い」が生じるようであった。

もちろん、こうした気まぐれ的な「好き嫌い」の発生には、高次脳機能障がいのひとつの特徴である、「感情のコントロールがきかない」、「情緒の不安定がある」という障がいがある程度関わっていると思われる。しかしながら、筆者の観察においては、「人を嫌う」という感情に限っては、「不安定」どころか、かなり安定的に維持される傾向が強くみられた点が特徴的であった。

この点についてすこし付言しておきたい。これまでの高次脳機能障がい者における「持続」の議論を引き継いで考えるならば、こうした対人的悪感情が一定程度であっても「持続」する、という事実は興味深い。とくに筆者の観察では、全般的な記憶力低下を症状として持つ者であっても、ネガティブな情緒に関してはそれが長期間維持されて持続するケースが多く見られた。なおかつ特徴的なのは、こうした事例においては、「悪感情を生じさせる元となった出来事自体は忘れるが、それに関わった相手に対する悪感情だけが持続する」というケースが多いことである。すなわち、出来事の詳細は忘却され、抽象的な対人的悪感情だけが残されるのである。蛇足だが、こうした記憶が関与する人間関係トラブルを第三者が平和的に解決する、あるいは、合理的、説得的なやりかたで解決するのは、非常に困難であったことはいままでもない¹⁵⁾。

本筋にもどろう。メンバーが「自由に」やめていくこと、そして、その理由が、主観的な「好き嫌い」であること。これらのことは、＜信頼＞の形成にとってはどのような足かせとなりうるのだろうか。

4-2-1 「自由」と「好き嫌い」

さて、先述したように、「信頼」は瞬間的に形成されることはありえない。どのような信頼であっても、それには一定以上の＜時間＞が必要であった。では一方、コロボックルにおいてメンバーがやめていく原因となる「好き嫌い」は、どのような時間規模のうちに生成するのであろうか。筆者の観察によれば、個人差は多少あるにせよ、比較的短期のうちに、些細なことをきっかけにして生じることが多い。

このように考えてくると、すべてにおいて「自由」を尊重する高次脳機能障がい者のコミュニティにおいては、「信頼」が形成される以前に「好き嫌い」が比較的安易に形成され、それが原因でコミュニティから脱退する、というパターンが繰り返されていることになる。このことは何を意味するのであろうか。

4-2-2 「好き、かつ、信頼できる」／「嫌い、しかし、信頼できる」

ここで誤解のないように強調しておきたいが、本稿は「コロボックルにおいては信頼が形成されにくい」、あるいは、「コロボックルでは信頼が形成される土台が希薄である」といった類のことを述べようとしているわけではない。現に、筆者のフィールドワークにおける観察からは、指導員や役員も含め、コロボックルに集う人々のあいだに、通常より強いといっても過言ではない、極めて深い信頼関係が確かなものとして感じられたのであった。

では、何が問題であるのか。

前節からの議論を引き継ごう。問題は、自由を第一義とするコロボックルにおいては、「信頼」が形成される以前に、「好き嫌い」によってコロボックルを脱退してしまう、ということであった。ここから考えると、実際のところコロボックルにおいて生成されることが可能な「信頼」とは、「相手のことが、『好き』で、かつ、信頼できる」という類のものであって、「相手のことが、『嫌い』、しかし、信頼できる」というパターンは生じにくい、ということが明らかになる。

実はこのことは、彼ら高次脳機能障がい者が社会において他者と共存することを考慮するならば極めて重要な問題であると考えられる。なぜならそれは、この「嫌いであるが、信頼できる」という信頼のあり方は、彼らが復帰を目指す場である社会における組織（とくに会社組織）のなかでは頻繁にみられるものであり、かつそれは、「組織の運営・維持上、必然的に生じうる」信頼のあり方であるからである。いうまでもなく、会社的な組織において求められるチームワークには、人としての「好き嫌い」を副次的なものとしたうえで、仕事を分担・依頼・共有しあうような関係性が重要なものとして含まれる。ここにあらわれる類の信頼は、極めて純粋な「事務的信頼」と、いわゆる「人間的な信頼」との間に揺れ動きながら位置付くようなものであろうが、いずれにしろ、コロボックルという場が他者と共同で何らかの作業を行う場である以上、無視することのできない「信頼」のあり方であるに違いない。

コロボックルという場に求められる重要な機能のひとつに、家庭と社会の「中間的」存在として両者を架橋するはたらきがある。このような観点からここに挙げた問題を考えるとき、本節でとりあげた「参加の持続」と信頼生成の問題はより一層重要な意味合いを帯びてくるはずである。

5 まとめにかえて——有機的な「持続」の維持への方途

ここまで、「信頼する」という問題に関して、他者とのコミュニケーションの蓄積および沈澱としての「記憶」という側面、次いで、信頼が生成される場としての高次脳機能障がい者コミュニティへの「参加」という、二つの側面から議論を行ってきた。紙幅の関係から、これ以上の議論を深めることは叶わないが、これらにおいて共に「持続」が欠如することが、信頼形成に深刻な影響を及ぼすことが示された。

本稿の貢献がいくばくかあったとすれば、それは、問題の解決よりもむしろ、問題の発見であったといえるだろう。その詳細は既に述べてあるのでここで繰り返すことはしないが、さいごに、そうした問題を今後引き継いでいくための課題を簡単に提示して稿を閉じることにしたい。

中心的な課題となるのは、やはり、先にあげた「持続」を維持するための環境とはどのようにあるべきか、という問題であろう。すなわち、記憶の持続を、機械的（単なる機械的な外部記録装置）なものではない方法で、また、参加の持続を、強制・義務的ではないしかたで（しかしながら当事者の自由を最大限保証するしかたで）、うまく維持する方途の探索である。

極めて困難な問題ではあるが、こうした有機的な「持続」のあり方こそ、「信頼」という、これもまたひとつの持続の生成を強く支えるものであることは間違いない。おそらくそれは、人工物や固いルールといったような冷たい外部によって成し遂げられるものではなく、「生」という持続の本質に深く根ざすものであるだろう。（その意味において、われわれは、前にすすむというよりも、もういちどベルクソンに戻らなければならないのかもしれない。）

注

- 1) 高次脳機能障がいとは、事故や病気によって脳組織が損傷されたため、言語・記憶・思考・注意・判断といった高次の認知機能に変調をきたす障がいのことである。この障がいは、たとえば前向き健忘（新しいことの記憶）、注意欠陥障がいといった特定の認知機能の障がいであるため、身体能力（ADL等）や他の知的能力は回復したにもかかわらず社会復帰が困難になる場合が多い。そのため高次脳機能障がいにおいて障がい認定・機能回復（機能障がい）に関する医学的・福祉的方法論の確立が必要とされると同時に、社会復帰（社会的障がい）に関する実践研究が急務とされている。高次脳機能障がいに伴うその他の症状としては、情動障害（感情易変、幼稚化、攻撃性、自己中心性の増大などの人格・性格変化）もあらわれることが多いが、これらを定量化して評価する共通尺度は未だ実用化の段階には至っていないのが現状である。
なお、交通事故等の外傷による高次脳機能障がいを、とくに「脳外傷による高次脳機能障がい」と呼ぶことがある。
- 2) たとえば、「Q&A 脳外傷 一人ひとりのためのガイドブック」（日本脳外傷友の会、2001）、「脳外傷 ほくの頭はどうなったの？」（原口三郎、1999）、「脳外傷友の会『コロボックル』5年の歩み」（脳外傷友の会『コロボックル』編著、2003）などにおける事例報告。
- 3) ここでは「社会復帰」を、＜障がい者が無難に社会生活を送れるようになること＞として広く捉えておく。
- 4) 筆者の専門領域は記憶論・時間論（主として心理学）である。
- 5) 「持続」という語に关しては、かのベルクソンをはじめ様々な哲学的議論があるが、ここでは単に、日常語の「つづいている」・「つづく」といった意味合いで用いる。
- 6) いうまでもなく、ひとことで「信頼」といっても、それは安易に定義できるようなものではないと思われる。なぜなら、それは固定的な物質のように静態的に存在するものではなく、人と人との関係性そのものに内在しつつダイナミックな変容を孕む動的なものであるからである。むしろ、本稿は、「信頼」の厳密な定義やその在りようの詳細な記述を目指すものではないから、このことは理解しつつ措いておく。
- 7) 一般的には「彼／彼女」と表記すべきであろうが、高次脳機能障がい者には若い男性が相対的に多いため、このように表すことにした。
- 8) もちろん、社会的地位やある種の職業において、他者を信頼させるような社会的シンボルは存在しようが、それとて、昨今、万能の記号ではないことは周知の事実である。
- 9) Personal Digital Assistant の略。携帯電話の通信機能とパソコンの情報管理機能を併せて小型化した情報管理機器。小型手帳サイズのものが多い。現在のところ、ソニー社のCLIEやシャープ社のZAURUSといった製品がよく用いられている。
- 10) 考えてみれば、そもそも、記録に多くを頼る他者を見る目じたい、人によって異なるだろう。記録に依

存する人物を、たとえば、「自分の頭で記憶できない人なんて信頼できない」と断罪する向きもあれば、
ぎゃくに「多くのことをきちんと記録として残していく人物だから信頼できる」と評価するものもあるだ
ろう。

- 11) 本稿はその可能性を排除するものではないが、繰り返し述べるように、そこには記憶障がいによる大
きな困難が存在している。
- 12) 友の会「コロボックル」を運営母体として、1999年3月に小規模作業所「コロボックル」が発足し、
2003年4月に、クラブハウス「コロボックル」に改称された。
- 13) 筆者は1998年より2002年まで札幌に在住していた。
- 14) 小規模作業所（当時）『コロボックル』のこと。
- 15) なお、先にとりあげた「一樹さん」の事例では、対人的悪感情はその原因である出来事とともに記憶か
ら消失しており、筆者の観察とは対照的である。それぞれ興味深いが、詳細な比較検討は本稿の手に余る
ので別稿に譲ることにしたい。

文献

- コロボックル, 2003, 脳外傷友の会「コロボックル」5年の歩み
コロボックル, 2005, 機関紙『コロボックル』特別号, 2005—1—10号
原口三郎, 1999, 「脳外傷 ほくの頭はどうなったの?」明石書店
Hilts, Philip J. 1995. Memory's Ghost: The Nature of Memory and the Strange Tale of Mr. M. Simon &
Schuster. (竹内和世訳, 1997, 『記憶の亡霊』, 白揚社,)
日本放送出版協会, 1993, 「NHKサイエンススペシャル 驚異の小宇宙・人体Ⅱ 脳と心 3 人生をつ
むぐ臓器 [記憶]」, 日本放送出版協会
日本脳外傷友の会, 2001, 「Q&A 脳外傷 一本人と家族のためのガイドブック」明石書店